慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 山腰修三著『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012年
Sub Title	
Author	烏谷, 昌幸(Karasudani, Masayuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.180- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 山腰修三著『コミュニケーションの政治社会学』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：山腰修三著

『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房、2012 年

烏谷　昌幸

「見えないもの」を見ることに興奮するのが社会学者の性なのだろうか。社会学者はこれまで日常に潜む「小さな政治」や目に見えない権力の働き（＝不可視の権力）を浮き彫りにすることに大きな関心を寄せてきた。

しかし、この種のミクロな政治、不可視の権力への理解が深まったことによって、既存の大文字の政治に対する理解がどれほど深まったのであろうか？例えば言語や記号の意味作用を通して不可視の権力を読み解くようになることで、現実政治の捉え方はどのように変わってくるのであろうか？

ここで取り上げる山腰修三著『コミュニケーションの政治社会学―メディア言説・ヘゲモニー・民主主義』はこうした問題意識のもとに、ミクロな政治への考察を深めながらその成果を大文字の政治の分析へと展開していくことを目指した著作である。

評者は著者と同じ研究室に所属し、『政治コミュニケーション―理論と分析』『ジャーナリズムとメディア言説』などの著書をもつ大石裕教授（三田社会学会員・慶應義塾大学法学部）のもとで共に社会学、政治学、マス・コミュニケーション論を学んできた。そのため、評者は著者と考え方の癖のようなものを無自覚に共有しているところがあると思われる（例えば「コミュニケーションの政治社会学」というタイトルを聞いただけである程度の想像が働いてしまうなど）。いわば完全に他人の眼で距離を置いて見ることが難しい部分がある。しかし、そのぶん努めて突き放した読み方をするように最大限心がけたということは最初に言っておきたい。

さて、本書において著者が取り組んだのは、政治コミュニケーション研究における批判学派の過去・現在・未来をいかに架橋することができるかという問題であったと思われる。具体的にいえば、批判学派の現代的展開として位置づけられるカルチュラル・スタディーズの理論的意義を改めて詳細に検証し、その成果を継承・発展させる思想としてラディカル・デモクラシーを見出し、この＜二つの思想の出遭い＞が意味するところを突き詰めてみようとしたのである。

本書の読みどころのひとつは、間違いなく、政治学的な問題意識と突き合わせながらカルチュラル・スタディーズの「再発見」がいかになされたかという点にある（第 1 章、第 2 章を参照）。とりわけラディカル・デモクラシー論への展開を見越しながら、著者がカルチュラル・スタディーズを民主主義論的に読み替えようとしている場面は読んでいて興味深い。

著者によるとホールの「エンコーディング／デコーディング」モデルには、60 年代の対抗文

烏谷昌幸「書評：山腰修三著『コミュニケーションの政治社会学』」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）180-183 頁

化の台頭を背景とした参加民主主義的プロジェクトとしての側面があった。しかしそれは同時に、労働者「階級」を主軸に置いた階級闘争を想定したものから始まったものであった。ところが後続の経験的なオーディエンス調査は、同じ労働者階級に属するはずの人々がテレビ番組を多様に読んでいることを「発見」し、「階級」アイデンティティを特権的な位置に据える議論が相対化されていくこととなった。例えばカルチュラル・スタディーズにおけるキーパーソンの一人であったデビット・モーレイの調査研究では、「ネイションワイド」という報道番組がどう視聴されたかがグループ・インタビューの形式で調査され、本来「共通の階級」に属するはずの「見習い工」、「労働組合員」、「黒人学生」のグループがまるで異なる読み方をしていたことが明らかにされた。

さて、こうした「多様な読み」の発見は「記号論的民主主義」という視点から要約されカルチュラル・スタディーズの民主主義観を象徴するものとなっていったが、著者はこの傾向に対して批判的な評価を下している。というのも、記号論的民主主義は、視聴者の「多様な読み」が人々の政治参加を促進する文化的基盤となることを主張し、政治的民主主義に貢献するものであることを主張したが、著者はその貢献が不十分なものにとどまらざるを得なかったと判断するからである。とりわけ 1980 年代以降に先進国で大きな力を得た新自由主義に対して有効な批判を行えなかった点は著者にとって重大な問題として把握されている。

反対に、ここで著者が高く評価するのが、ホールの「意味づけをめぐる政治」の議論である。ホールは、サッチャー政権の新自由主義的な政策によって打撃を受けたはずの労働者階級の中からも、サッチャーに対する強い支持が生じていた点に着目している。本来はサッチャーの呼びかけに対して「対抗的な読み」を担うはずの人々が、なぜサッチャリズムの支持者となったのか？「多様な読み」が「合意」へと縮減される政治的な契機はどこにあったのか？

ホールはこの疑問を解くために、エルネスト・ラクラウの言説概念を導入することで新たな理論展開を図ろうとした。ここにおいて著書はホールとラクラウという本書の二人のキーマンがどのような理論的接点を持っていたかを具体的に読者に提示してみせる。

著者が特に重視するのは「節合」という概念である。ここで言われる「節合」とは、「意味付与実践を通じて本来関係を持たない要素の間に新たな意味関係を構築すること」であり、「差異から統一性を構築すること」という表現にも置き換えられるものである。著者によると、サッチャー政権は民営化政策などの個別政策については必ずしも高い支持を得ていたわけではなく、メディア・オーディエンスも個々の政策をめぐっては「多様な読み」を行っていたという。しかしサッチャーが掲げた「自由」や「英国的なもの」という個別の争点を超えた次元で作用するテーマや論理がサッチャリズムを支える「読み」を編制していった。ホールがラクラウから得た「節合」の考え方は、このサッチャリズムの重要な側面を読み解くうえで大きな役割を果たしたのである。

さて、ここまで見てきたような著者の精緻な理論的整理の作業を通して、評者は改めてカルチュラル・スタディーズの面白さを再発見することができた。特に政治学的な眼でカルチュラ

ル・スタディーズを読み換えようとする著者の姿勢は知的刺激に富むものであった。またこれに加えて評者は経験的な調査・分析の持つ意義についても改めて実感することができた。この点著者によって「記号論的民主主義」の概念を鋭く批判されることになったジョン・フィスクの研究なども、精力的に経験的分析の成果を積み重ねていった側面は高く評価されるべきであると感じた。

批判学派の思想的系譜のなかで見るならば、思弁的な思惟に傾きがちであったそれまでの傾向から距離を取り、徹頭徹尾、経験的な分析にこだわろうとした点はやはりカルチュラル･スタディーズの大きな魅力であったことを確認しておかなければならないだろう。こうした志向性が今後の批判的コミュニケーション研究においても継承されていくことを期待したい。

では、著者が本書で目指したカルチュラル・スタディーズからラディカル・デモクラシーへの発展的理論展開についてはどう評価すべきだろうか？ここでは無いものねだり式の指摘になってしまうことを詫びつつも、今後の研究展開に絡んだ質問をするために以下二点気がついた点を書き留めておきたい。

まず第一の点は、ヘゲモニー概念の説明と関わるものである。著者はカルチュラル・スタディーズ、ラディカル・デモクラシー、さらには批判的言説分析という本書で検討される三つの理論の全てにおいて登場してくるのがヘゲモニーの概念であるとしてこの言葉に特別な注意を払っている。評者が気になったのは、著者のヘゲモニー概念の説明の仕方が「冷戦の終結」という重要な歴史的文脈を欠いていることである。

批判学派の系譜に属する思想にとって、冷戦が西側の勝利によって終わったという歴史的事実をどう受け止め、どう昇華するかという問題は、文字通り死活問題である。「冷戦の終結」という事件に前後して、ラクラウのヘゲモニー概念がどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのかについて著者自らもっと言葉を補うべきではないだろうか。この点ホールや他の論者との比較があってもよいかもしれないが、いずれにせよ、批判学派の系譜に属する理論、思想をめぐって、冷戦終結という大きな節目を通過してなお生き残る力を有しているのは誰のどのような思想、理論であるのか、またその力の源は具体的にどのような点に見出せるのかを説明する必要がある。これは 21 世紀の民主主義論がまず最初に片付けておくべき問題であり、著者の「批判的コミュニケーション論」にとっても無関係ではないと思われる。

第二に、著者はラクラウのラディカル・デモクラシーの思想が、単なる脱構築的言説分析で終わらない、「対抗的ヘゲモニー編制」のための政治理論であることを明らかにしてくれている（第 4 章を参照）。敵対する政治勢力のヘゲモニーを「壊す」ためのアイデアと、これに対抗する自分たちの対抗的ヘゲモニーを「創る」アイデアが同時に考えられている点がラクラウの思想の興味深い特徴と思われる。

だが、本書「第Ⅱ部　日本の政治社会における事例分析」では、どちらかというと新自由主義や戦後日本の高度成長期の論理などを脱構築的視点から批判的に分析する（壊す）作業に重点が置かれており、「創る」作業についての本格的な展開は今後の課題とされている。この点第

Ⅰ部の理論編を読みながら色々な（勝手な）想像、推測を働かせた評者は、悶々としながら本書を読み終えなければならなかった。

とはいえ、著者が今後の研究事例として選んだ沖縄問題は、戦後日本の民主主義思想がもっとも厳しく試され続けてきた現場であり、このテーマに対する著者の積極的な参戦は大いに楽しみである。今後の研究展開を大いに期待したい。

そこで、著者リプライにおいては＜沖縄問題を事例に、ポスト冷戦期の日本社会における対抗的ヘゲモニー編制の可能性をどのように考えることができるのか？＞という点に関して、著者の現在の見通しを語ってもらえれば幸いである。

【参考文献】

ジョン・フィスク（1996）『テレビジョンカルチャー―ポピュラー文化の政治学』伊藤守、藤田真文、常木瑛生、吉岡至、小林直毅、高橋徹訳.梓出版社.

（からすだに　まさゆき　武蔵野大学政治経済学部）